

学芸員と標本土—鳥獣標本を継承する2つの人材—

ひろたに ひろこ
広谷 浩子(学芸員)

旅立ち

この秋、私たちは、大切な人物を日本から送り出しました。2009年冬から10年近くにわたって、さまざまな場面で当館の活動を支えてくださった標本土の相川 稔さん(自然科学のとりま 第16巻3号)。高校卒業後、ドイツに渡り、標本作製の技術を学び、ドイツの博物館で標本土として働いていた方です。「標本作製の技術を日本にも」と、帰国された相川さんは、多くの人たちに標本作製の技術を伝えてきました。確かな技術、豊富な知識と何よりも穏やかな性格に魅了され、多くの人たちが彼の元を訪ね教えを乞うてきました。しかし、国内の博物館では、安定したポストが見つからず、とうとう古巣のドイツへと旅立って行かれました。

標本土の活躍

「標本土」とは耳慣れないことばですが、欧米の博物館では、標本の作製・管理や様々なもの作りを行う技術者が働いているのです。総合博物館では、動物資料や地学資料などの各分野に特化した複数のスタッフがいて、ことも珍しくありません。そのような技術者を養成する専門学校もあります。日本には、はく製や骨格標本等の作製を請け負う「はく製師」がいますが、標本土は博物館を活動の場としている点が特徴です。

標本土は博物館活動を支える人材として活躍し、展示のためだけではなく、研究用や教育用など目的に応じた標本を用意したり、修繕をしたりもします。実際、相川さんが活動をしていた時には、我々も様々な教育用標本を作っていただきました(自然科学のとりま 第22巻1号)。

標本土は博物館の事業の中でこそ最も輝く人材なのですが、博物館によりそう技術者として働きたいという相川さんの希望は、とうとうかないませんでした。10年の間



図1. 相川さんの実演を見る人々。鳥学会2018。

	仕事内容	必要とされる素養	研修・養成形式
学芸員	資料の整理保管 資料の情報管理 地域博物館連携の推進	自然史標本の継承に関する情報 対象動物の ・生態的知見 ・形態的知見 衛生的な知識 ・人獣共通感染症について ・作業時の事故等への備え	研修会 情報交換会
標本土	検体の見極め 標本作製 作製技術等の指導	標本作製技術 標本保管方法の知識 道具・薬品についての知識 技術伝達のための指導力	講習会 技術認定 登録システム

図2. 博物館の鳥獣標本継承に関わる2つの人材(作図 加藤ゆき)。

に、標本を作ったり活用したりする人々がふえ、標本土の存在が注目されるようになりましたが、おひざ元の博物館に改革の風が吹くことはなかったのです。一緒に働いて、標本土の仕事の重要さをわかった私が、働く場づくりに貢献できなかったことを深く反省しています。

後悔を機に提案したいこと

深い反省を超えて、私がたどりついたのは、博物館で鳥獣標本作製を担う人材を育成する事業を提案することです。博物館の仕事の内容と必要になる素養を整理して、博物館にとって必要な人物像を明らかにしたいと思います。

図2にあるように、博物館の鳥獣標本継承に関わる人材は、大きく2つに分けられます。ひとつは、標本の収集と管理を担う人、これが学芸員にあたります。もうひとつは、標本の作製加工技術の開発や技術指導を担う標本技術者(=標本土)です。

学芸員は、研究、資料の収集保管、展示・普及という3本の博物館事業をバランスよく進める必要があります。しかし、哺乳類や鳥の検体処理には時間がかかり、バランスは崩れがちです。今後は、鳥獣標本の作製等を標本土の仕事として学芸員の業務から切り分けることが大切だと思います。また、標本作製のプロセスを「お手伝い」と位置付けてボランティアに預けてしまうこともおかしいです。責任をもって仕事を遂行するためには、確かな技術と知識を持ち、さらに後進を指導する力もある人材を、博物館として確保すべきだと思います。

次に、標本土が働く環境を作ります。学芸員さえ不足している今、標本土のポストを確保することはとても難しいことです。し

かし、全く不可能というわけではありません。折しも国立科学博物館では、標本づくりをする職人をテーマに企画展が行われています。山階鳥類研究所など標本作製、管理を専門とするスタッフが活躍している施設もあります。このような施設の取り組みを参考に、標本土を迎え、鳥獣標本を作り継承していくにはどのような環境が必要か、2段階で考えてみました。

①標本作りを日常的に行なえる環境：標本作りに興味を持つ人々は多く、中には、専門家を志望する人もいます。単なる働き手としてではなく、将来を担う標本土の卵として活動できるように、標本用の材料(検体)、道具、場所を確保することに加え、発表の場を作り、標本土相互の研さんの機会を作ることが重要だと思います。もちろんそこには優れた指導者がいることが大前提です。

②標本土と連携する施設・学芸員の輪を広げる：1施設1人にこだわらず、複数の施設が協力すれば、標本土の雇用が可能かもしれません。複数の拠点で博物館の事業に関わり、後進の指導にもあたるとい形です。そのためには、連携する施設の担当者(多くの場合は学芸員)は、標本土の専門性や標本継承の重要性をよく理解して、自らの職務(資料収集管理と研究)を遂行し、常に意識向上に努める必要があります。

提案の実現を目指して

2017年度から、神奈川県内の博物館や動物園、科学館が連携して標本の管理や作製手法、情報管理をすすめるプロジェクトを始めました。10月には各館の担当者が当館に集まり、情報共有や技術習得の重要性をあらためて確認しました。「標本土プロジェクト」の布石を打っていきたいのです。